

尾崎士郎と平林初之輔

——「ごろつき」論争をめぐる——

都 築 久 義

処女作発表まで

尾崎士郎の文学的出発は、大正一〇年一月二日に発表された『時事新報』の懸賞短篇小説に、見事二位に入賞したことがある。

この入選談話で「創作と云へば今度書いた『獄中より』が後にも前にも始めてのもので真実の処女作です。」と尾崎も語っており、事実、これまで、『一大帝国』や『国家社会主義』といった政治思想雑誌に小説まがいのものを発表したことがなくはなすがそれは習作というにはほど遠いものであった。

もともと彼は中学時代から「政治家として世に立たん」(『第三帝国』大4・4)と志し、文学よりも政治に惹かれていた。現在判明している限りでも中学時代に彼が投稿した雑誌は、『第三帝国』(主宰・茅原華山)、『世界之日本』(主宰・橋本徹馬)、『雄弁』(講談社発行)など、いわゆる文芸投書雑誌ではなかった。しかも『世界之日本』

は、「如何にして選挙権を拡張すべきか」という、同誌の創刊五周年の懸賞論文に応募して、三位に入賞（大4・7）したものであり、『雄弁』のそれは「尾崎行雄氏の為めに弁ず」（大4・9）と題する中学生の分際で時の太政治家を論じたものである。

『第三帝国』には、最初の投稿が主宰者・茅原華山の前文付の「中学と師範との改革」（大4・4・5）。次いで「帝国主義者に与ふ」（大4・9・1）と「考の新意義」（大4・11・11）の合計三篇の投稿をしている。

こうした政治・思想雑誌への投稿だけでなく、校内では雄弁青年として声名を馳せて闊歩し、級友を集めては天下国家を論じ、雄弁大会ではいつも活躍していたというから、彼は名実ともに政治青年であったのである。

したがって政治家を志して早稲田に進み、文科ではなくて政治科には学んだのも、彼にとって選択の余地のない進路だったといえよう。

大正五年四月、早稲田大学高等予科政治科に入学すると、彼はただちに、冬の時代といわれていた社会主義者の巢窟・壳文社を訪ね、彼等と交際し始めた。これは、愛知二中時代の級友に山川均の義理の甥がいて、彼の紹介によるものであることを彼は随所で書いている。

そうする一方で、翌六年正月には、王道的世界主義を標榜する立憲青年党の党首・橋本徹馬を訪問している。橋本とは前述の『世界之日本』の懸賞入選が機縁となって知己を得た。ただし、彼はその頃は『世界之日本』を辞め、新たに『一大帝国』を創刊（大5・3）していた。

橋本徹馬は、大隈重信の知遇を受けて立憲青年党を組織し、大隈の政敵を攻撃すべく演説会を開いたり、地方遊

説にも出かけ、着々と政治家への道を歩みつつあった。

橋本の懇請で『一大帝国』社に入社（大6・2）した尾崎が、橋本に従って演説会に出席し、得意の弁舌を振ったことはいうまでもない。同誌の演説会報告記（大6・3）には「早大雄弁会の新進雄弁家として名声噴々たる尾崎士郎云々」といった記事があり、北陸・関東地方の遊説（大6・4・7・15）に尾崎も同行し、報告記（大6・6）を彼が執筆している。

また、同じ頃、堺利彦がおりからの総選挙（大6・4）に立候補すると、この応援にも顔を出し、「毎日の様に学校を怠け続けて売文社に出かけてゐた。」（「注意人物印象誌」『新公論』大9・2）という。

まことに彼は、東に皇室擁護の橋本徹馬が演説会を開けば飛んで行き、西に社会主義者の堺利彦が選挙に立てば、こちらでも旗を振るといった具合に、政治青年・尾崎士郎の面目を大いに發揮していたわけである。

大正六年九月、入学して一年後、今度はお膝元の早稲田で学長人事をめぐる学校騒動が勃発。演説と騒ぎの好きな彼が黙っているはずもなく、たちまち「人生劇場」に活写してあるごとく最下級生でありながらリーダーとなつた。騒動の様子は連日新聞で報道され、尾崎の名前が頻繁に登場していることから、彼の活躍ぶりは目に浮んでくる。早稲田でも、雄弁家・尾崎士郎の名を校内にとどろかせたのである。

そして、この騒動が沈静すると尾崎は学校へは足を向けなくなり、いよいよ、本格的に政治運動に挺身する。

警保局の『特別要視察人状勢一斑（第八）』によると、加藤時次郎や堺利彦らが中心となつて作つた事実上の普通選挙運動団体「社会政策実行団」に加入し、特に大正六年一二月六日には加藤宅に集つて、運動方法を協議した

結果、翌七年一月二四日を皮切りに演説会を催すことを決め、尾崎もその重要メンバーに加えられている。さらにこの直後の一二月二四日付で「特別要視察人」の最高ランク「甲」に指名され、二月二日には、「閥族撲滅全国青年大会」を日比谷公園で開こうとしたところ、開会直前に検束されるなど、尾崎の行動は過激化していった。

もっともこの年（大正七年）の六月、郷里で父親の後を継いで郵便局長の任についていた長兄が、放蕩の末、金を使い込み、ピストル自殺をするという衝撃的な事件が起こり、おそらくそれも一因であろうが、彼の言動はしだいに軟化する。後述の売文社入社後の彼は、デモクラシー論者と社内では見なされ、最も穏和派だった（遠藤友四郎『社会主義者になった漱石の猫』）らしい。

ちなみに、大正七年八月一四、一五日、米騒動の余波で臨機検束されたときのランクは「乙」に下がっている。長兄の自殺、尾崎家の没落によって自活を余儀なくされた尾崎は、やがて売文社に月給社員として入社する。大正七年一〇月頃のことである。

当時の売文社は、彼が初めてここを訪れた二年前と社内の様子も雰囲気も著しく変っていた。社員が一〇人近くに増えていたこともさることながら、社長の堺利彦は事務所にほとんど姿を見せず、山川均も下獄してもはやくそこには居なかった。そのため、売文社の経営は高島素之に任せられ、彼が事実上の社長の実権を握っていた。

社内では日本の社会主義運動や労働運動が再び活発化の兆しを見せ始めたにもかかわらず、肝腎の売文社がいくこうに動き出そうとしないことへの焦りがありありとうかがわれ、堺利彦への不満と人間的反感心が傍目にも明かなほど漂っていた。耐えて団結することよりも時勢に遅れまいとする気配が濃厚だった。

こうした雰囲気は、堺を追い出し高島素之を総帥にかつごうとする盟友・遠藤友四郎の画策によってまもなく頭在化し現実のものとなった。山川の出獄を機に大正八年三月、堺・山川と高島は明治四三年から続いた同志の関係を絶つたのである。尾崎は、彼のことに従えば時のいきおい（『小説四十六年』）で高島派に走つたものの、決して後味のよいものではなかったようである。

高島を盟主にした五人組は、すぐさま『国家社会主義』を発行（大8・4）し、皇室社会主義を掲げて労働者に対して啓蒙活動を始めたが、社会主義関係者よりもより一般労働者からも見向きはされなかった。

大正八年八月、尾崎が肋膜炎で入院しているさなか、この雑誌は潰れ、同志だった者も散り散りになった。

退院後、尾崎は『毎夕新聞』や『東京毎日新聞』を転々としたがその頃、偶然、高島素之に会い、自分の家に来ないかと誘われ、そのまま彼の家に転り込んだ。高島は彼の畢生の仕事である『資本論』の翻訳に全力を傾けるかわら社会時評家として論壇に進出しかけていた。『東京毎日新聞』には大正九年六月頃まで、尾崎の署名入りの記事が散見するので、彼が高島の居候となつたのは、それ以後のことであろう。ついでながら『時事新報』の懸賞募集の記事は、大正九年一月一日に出ているが、彼はこの記事を高島の家の近くのミルクホールで読み、一夜で応募作品を書いた（『小説四十六年』）といっている。

なお、この前後の大正八年六月茂木久平と共著で売文社から『西洋社会運動者評伝』（初版発禁）を出し、大正九年一月には、高島素之の英文の序文が付された『近世社会主義発達史論』を三田書房から上梓した。

以上が彼の処女作を発表するまでの閲歴の概略である。この間に、彼は『一大帝国』をはじめ、『新社会』（売

文社発行)や『国家社会主義』、それに室伏高信主筆のデモクラシー雑誌『批評』(大8・3と大9・12)などに社会主義関係の内外の人物論や書物の紹介・批評あるいは時評の類に筆を染めた。文筆活動と無縁ではなかったとはいえ、彼の経歴やかかわった雑誌の名前が物語るようにそれは「文学」とは少し距離のあるものである。

それゆえ、前引の彼の入選談話はあながち誇張でもないし、続いての「将来も創作をやりたいと思つてますが、自分に果して作家になつて生活し得られる丈の天分があるかどうかと云ふ事が不安で未だ決して兼てる次第です。」との発言も必ずしも彼の謙遜からではなかった。

実際、尾崎の口ぐせを借用すれば、その頃の文壇の垣根は高く、師匠もなければ文学上の仲間もなかった尾崎の占めるべき文壇の席があるはずはなく、彼が身の振り方に躊躇したのも無理からぬことであつた。

ところが、そういう尾崎に、いやそうだからこそ、彼に目を着けた奇妙な編集長がいた。『改造』社の山本実彦である。彼は、尾崎が『近世社会主義発達史論』(前出)を著わしたときに、『改造』(大10・2)で紹介し、社内でも「これはいけると……」言いふらしていたそうである。その尾崎が、今度は文学賞でも入選したのだから、いよいよ彼に惚れ込んだとて不思議はなからう。

『改造』は大正八年四月の創刊。新進の総合雑誌だったが、古舗の『中央公論』に対抗意識を燃やし、文芸方面の充実にも力を入れ、新人発掘にも意欲的だった。

労働運動や社会主義運動の活発化は、中野秀人の「第四階級の文学」が『文章世界』の懸賞に当選(大9・9)したことに象徴されるように、文壇にもそうした傾向の文学を生み、やがて主流にのしあがらんばかりの氣運を見

せていた時代である。それゆえ、山本が尾崎士郎に注目したであろうことは容易に想像がつこう。

なにしろ、「第四階級の文学」を熟っぽく主張する中野や彼に続いた平林初之輔よりも、たとえぼつとに社会主義関係書を二冊も世に出している点を想起しただけでも、尾崎の方がそれを語る資格は十分あった。のみならず、安全地帯で机上の空論を振りまわしてばかりいるのではなく、日本の社会主義運動の先覚者たちと、苛酷な弾圧と戦い、困難な条件のもとで血みどろの体験を積んできたという輝かしい実践を尾崎士郎は持ち合せていたのである。

彼には筋肉労働の経験はなかったが、なまじ労働者出身作家の、それを売り物にしたり、いたずらに反抗的言辭を並べたてるだけの野卑な作品よりも、理論と実践に裏うちされた真の「第四階級の文学」が尾崎には期待できると山本は考えたにちがいない。

山本は、当分生活の保証はするという条件を呈示して、尾崎に長編小説の執筆を依頼した。この無名の青年への破格の厚遇にこそ山本の尾崎への期待が、いかに並々ならぬものであったかがうかがえよう。

『逃 避 行』

山本実彦の嘱望を一身に受け、数カ月を要して尾崎が書きあげた四五〇枚の長編小説の題名は「逃避行」。副題に「低迷期の人々―第一部」と付いている。大正一〇年の暮近い、一月二八日、四六版三八九頁、函入り上製本として刊行された。

ところでこの小説を公刊してまもない大正一一年三月一日号『内観』（主宰・茅原華山）に、尾崎は「何処へ

行く——最近の感想から——」を寄せ、次のように語っている。

私は去年の末私のいままでの生活の上に一新紀元を画するために『逃避行』といふ小説をかいた。私の芸術上の立場から眺めるとき、それが殆んど無価値に等しいほど失敗の作であることを私は認めてゐる。けれども、かやうに本質的な致命傷を承認しても、いや承認した上で猶ほ私には此作が私にとって忘るべからざる重大な意義を持つてゐることを主張したい心がある。——この作はいろいろな意味で私にいままで到底味ふことのできなかつた多くの事実——それはすべて人生の底深さに根ざすところの——を教へてくれた。いままで私の考へてゐた人生がいかに薄っぺらなものであるかといふことを私は沁々心から味ふことができたやうな気がする。この作において私の扱つたモデルのために私は知己朋友との間に従来の親しさを保つことができなくなつた。そんなことは物の数でもないが、山上に在るものゝ孤独と寂寥とが漸く私の上にのしかかつてきたのである。

『逃避行』はこれを一口で紹介すると、尾崎もその渦中において、しかも一役買ったあの売文社分裂騒動の顛末を中心にした、彼の自伝的社會主義運動青春記である。

事件に近い時点で書かれたことと、社會主義運動がますます進捗するなかで、当事者の一人が筆を執っているために表現や描写は稚拙だが、生々しい印象を読者に与える。

『改造』の宣伝文的にいえば、「我國に於ける唯一の社會主義裏面史」であり、当世流の言い方をすれば、社會

主義運動の内部告発書でもある。ただ、作者・尾崎も認めているように、際物的暴露小説的要素もあって、芸術的には失敗作だったかもしれない。

それはともかく、尾崎が、この作品の発表によって自らの実生活に一新紀元を画し、忘るべからざる重大な意義があり、かつそれゆえ知己朋友と疎遠にならざるをえなかったというのは、おそらく次の一点のためである。

小説では終章に近い部分。大河内（高島素之）が新たに興こした運動も行き詰りかけた頃、健一（尾崎）は下宿で寝転びながら、「久しい間投げ遣りにして机の抽出にねじこんであった日記帳」をとり出して、何か書きたくなつた。日記帳は三月二十五日のところで途切れている。――

「彼は一枚置いて新しい書き出しのところへ太い線を引張つた。そして十月二十八日と大きく書いた。これから始まるべき自分の新しい生活が此一本の線によって昔の生活から全く切り離されたやうな清々しさが心に湧いてきた。」

自分にとっては結局単なる知識階級の人間としての行為より考へられないのだ。労働階級のためにノ縦令いかなる言葉で叫ばれやうともそれは嘘である。自分達の内生活のリズムの何処に、真実に労働者のために――その無智なきたない、そして不謹慎な同胞のためにといふ要求が潜み隠されてゐるのであらうか。知識階級の何人が真に労働者の心をもつて労働者の生活の中に溶ろけ入るときがくるであらうか。彼等がいかに経済組織の变革について、如何なる感激をしやうとも畢竟、それは知識階級としての感激に過ぎない。それは労働者自身

の生活の上に築きあげられた哲学、理想からは似もつかないほど遠く離れたところにあるのだ。——然り、そして新しい時代が噴火山の吹き上げるやうに、地の底から下層に沈んだ人々の憎悪と復讐の毒々しい感情で固められた魂が天に上ってもれ上ってくるとき、知識階級の学理も主張も運動もすべて奈落の底に陥没してしまふであらう——

尾崎士郎は、幸か不幸か、たまたま日本の社会主義運動の再興と労働運動の揺籃期に、それを演出する中枢部に身をおいていた。それがために、その舞台裏も楽屋内も見ることができた。

なかでも、新しい時代の幕開けに際会して、この運動の領袖たちが総出演した壮烈な売文社分裂劇には、彼自身も狂言まわしの一人だったために、筋書はもとより、役者の胸の内まで見え見えたのである。

むしろ、ここで彼がたとい見るべからざるものを見てしまったとしても、それを黙認したり、芝居では舞台と舞台裏はちがうものだといったふうな、いわゆる大人の態度をとることができたならば、彼は知己朋友を失わずにすんだであらう。

あるいは、逆に気づくべからざることには気がつかないほど鈍感であったり、たとい気がついてしまったとしても、開き直って芝居を続けることができたならば、彼はやがて社会主義運動の新世代の指導者として、花やかな脚光をあびたであらうことはほほまちがいない。

明治社会主義時代からの古参運動者を別格とすれば、社会主義運動の総本山で育ち、二十才そこそこで社会主義

関係の著書を二冊も著わしている者など、当時彼をおいて他になかった。理論的にも、実践的にも同世代のなかで彼が群を抜いていたことは衆目の一致するところであつたからである。

しかしながら、彼はその道を歩むべき人間としては、あまりにも感受性が強く、誠実で、不器用だつた。大正一年三月、彼は前述の「何処へ行く」を書きあげると、いたたまれずに上海へ文字どおり逃避行した。

さて、ここに例示した『逃避行』の台詞は、どこかで聞いたことのある文句ではなからうか。いうまでもなく「宣言一つ」である。念のために書きそえておくと、有島の「宣言一つ」は大正十一年一月号『改造』に載つたものであり、尾崎の「逃避行」は大正一〇年一月に世に出たものである。

その「宣言一つ」は結語でこういつている。

どんな偉い学者であれ、思想家であれ、運動家であれ、頭領であれ、第四階級の労働者たることなしに、第四階級に何者をか寄与すると思つたら、それは明らかに潜上沙汰である。第四階級はその人達の無駄な努力によつてかき乱されるの他はあるまい。

周知のように、この「宣言一つ」が発表されるや、無名の尾崎の場合は全く黙殺されたけれども、さすがに著名な有島に対しては、あちこちからだだちにおびただしい反響が寄せられた。

なかでも、「第四階級の労働者たることなし」に「潜上沙汰」の限りをつくしてきた第一人者である堺利彦がい

ちはやく反論した「有島武郎氏の絶望の宣言」(『前衛』大11・2)が象徴的である。

堺は知識人社会主義運動者の泰斗にふさわしく、博覧強記に西洋の例をあげ、この運動における知識人の役割を説き、有島が配慮した当時の知識人指導者排斥論には「墮落した指導者は、何階級の出身に係はらずドシドシ切つて棄てつゝ進むまでの事」と断言し、

實際上自覚した優秀な労働者と、明白に労働階級の代表たる知識階級者とが結合して、一般民衆の指導者となり、代表者となり、××となるのが必然である。(略)故に知識階級者が新興労働階級の運動に参加し得ない理由もなく、其の指導者の一部となり得ない理由もない。(傍点都築)

と強く述べ、「従がって有島氏の『宣言』は、つまり温良なる人道主義者が絶望的逃避を試みた宣言に過ぎない。」と結んだ。

まことに堺の正論は異論をはさむ余地のない、完璧でかつ堂々たるものだった。

しかし、それには、「自覚した優秀な労働者」と「明白に労働階級の代表たる知識階級者」とが結合できたならば、という留保条件が必要である。そして「明白に労働階級の代表たる知識階級」なるものがほんとうに存在したならば、という前提条件が必要である。

まさにその点で有島は「私は第四階級以外の階級に生まれ、育ち、教育を受けた。だから私は第四階級に対して無縁の衆生の一人である。私は新興階級になることができないから、ならして貰はうとは思はない。第四階級のために弁解し、立論し、運動する、そんな馬鹿げ切った虚偽も出来ない。」と、いわゆる平野謙のいう「自己の肉体の不可変性を偏執せずにもらわれぬ文学者個有の立場」（『政治の優位性』とはなにか）から、その不可能なことを主張し、尾崎は「労働階級のために／＼縦令いかなる言葉で叫ばれやうともそれは嘘である。自分達の内生活のリズムの何処に、真実に労働者のために——その無智なきたない、そして不謹慎な同朋のためにといふ要求が潜み隠されてゐるのであらうか。」と、彼の体験的現実を突きつけているのである。

つまり、堺の主張はたしかに理論として正論でもあり、タテマエとしてはそのとおりであるが、実際には極めて非現実的な主張だったところに問題があった。すくなくとも、有島や尾崎の発言があった時代の堺の論駁には現実感が欠如していたことは誰の目にも明かであろう。

たとえば、「自覚した優秀な労働者」は、「明白に労働階級の代表たる知識階級者」と「結合」するどころか、むしろ彼等を排斥しようとしたのが実情である。もっと端的にいえば、彼等は知識階級に、「明白に労働階級の代表」たる資格があることなど、認めようとはしなかったのが実態だった。

社会主義運動史・労働運動史・プロレタリア文学運動史が語られるとき、ともすれば、マスコミ・ジャーナリズムで展開されたタテマエ論やいさましい反体制的言動や弾圧の歴史ばかりに目が向けられる。しかし、その裏では指導者どおしのすさまじい暗闘があり、激しい知識人排斥論が横行し、労働ブローカートの跳梁があった。したがっ

て、この事実こそ黙過すべきではなく、なかんずく「文学」を問題とするならばとりわけ無視してはなるまい。その意味で、平野が戦後いちはやく前述の文章に続けて「プロレタリア文学勃興の歴史は、その第一頁にすゑられたこの重大な問題を本来とことんまで追尋すべきだった。」との提言は貴重な意見である。

知識人排斥論

わが国の労働運動史にとって、大正八年が画期的な年であったことは、すでに多くの史書・研究書で説かれているところである。

内務省刊行の『大正十一年労働運動概況』でも冒頭の「総説」で、「我国の労働団体は大正七年頃迄に於ては日本労働総同盟（元友愛会）外一二を除く外極めて小規模にして……」と、やはり大正七年までと八年以後との著しい変化に着目し特筆している。

その理由については、同書で、「欧州大戦勃発以来企業界異常の興隆と物価の昂騰は賃金増加の程度を越え労働者の生活を圧迫」したこと、「社会問題に関する思想言論界の議論は益々労働者をして覚醒せしむる処ある」とと、「更に大正八年華府に開かれたる国際労働會議は我が国労働者を刺戟する所尠からず」といった点をあげて解説した。

内務省資料では、故意にか見解の相違のためか、大正六年一一月のロシア革命の成功と七年八月の米騒動にふれていないのが、なにか思惑ありげで興趣がそられる。

そして、この資料で「知識階級排斥の傾向」を次のように分析しているのもまた、興味深い。

本邦の労働運動は従来知識階級の援助指導に俟つもの尠なからざりしが近時純労働者中に多少の訓練と経験とを積むものを生ずるに従ひ知識階級に対する労働者の信頼漸く薄からんとする傾向を呈するに至れり。(略)
知識階級者は労働運動に対する態度打算的にして勝算の見込ある労働争議に対しては進んで介入するも然らざるものに対しては之を忌避するの風あるのみならず旗幟頗る不鮮明なりと謂ふに基因せり

それにしても、知識階級の指導者達が、労働者の覚醒を煽動したあげく、逆に覚醒した労働者達からポイコットされたというのはあまりにも痛烈な皮肉というべきではなからうか。

前述の内務省資料も述べているように、わが国の労働団体といえは、それらしいものは大正七年までは、友愛会一つだったといってもよい。その友愛会はそもそもが、東大法学部出身のキリスト教知識人、鈴木文治によって創立され、彼の交友関係から多くの大学教授などの賛助・支援を得て運営されていた。やがて大正六年に東大法学部を卒業した麻生久ら、吉野作造のデモクラシーを学んだ連中がここに乗り込み指導した。まさしく典型的なインテリ指導の労働団体であった。この友愛会にも、大正八年前後から、労働者の自立の動きが出てくるのである。

松尾尊兎の「友愛会史論」(『大正デモクラシーの研究』)によれば、純労働者出身で友愛会の幹部の一人、平沢計七は、麻生久らのグループの友愛会に対する働きかけは拒否しなかったが、その急進的主張には必ずしも同調せ

ず、むしろ反撻しがちであった。事実、平沢は、大正八年二月号の機関誌『労働及産業』で「日本の労働運動を知識階級の為めの労働運動とせられず、日本の労働運動は日本の労働運動なる事を根本に於て承認せられ、其為めに援助を仰ぎたしと思ふ」と注文をつけたという。

要するに、堺がいうところの「自覚した優秀な労働者」はインテリ分子の労働運動が、尾崎が指摘したとおり、「結局単なる知識階級の間人としての行為」にすぎないことを、鋭敏に見抜いていたのである。当人の主観的意図はともあれ、少くとも労働者の眼にはそうとしか映らなかつたわけである。

しかし、そのことは当の知識人指導者の典型、麻生久は自覚していて、含蓄あることを言っている。

これは、国際労働会議（前出）に出席する日本の労働者側代表選出問題について「不当なる労働者代表委員選挙に対し我会の執りたる態度顛末報告」と題して書かれた長文の一節である。

折角の智識階級の援助も往々にして労働階級の者に悪感を抱かせる。勿論所謂筋肉労働者と称する如き者の野心家の智識階級排斥の如きは意に介するに足りない。けれ共智識階級は夫れ自身の裡に労働運動に対して重大なる欠陥を有してゐる。夫れは他でもない。当にならなると云ふ事である。いざと云ふ時になれば身を翻して顧みないと云ふ事である。最初の断言も後には翻して顧みないと云ふ事である。智識階級のものゝ考へと自己自身の問題である、労働者自身の考へとの間には大部の相違がある。一は他人の事であり一は自分の事である。他人の事であれば兎角は真剣に考へないで、加減な事をする事が多い。之れが智識階級の者が容易に労働

働者階級の信頼を得がたい所以である。

(『労働及産業』大8・11)

かくして、従来知識階級の指導によって運営され、働者の教育や共済機関的色彩が濃く、労資協調を基本姿勢にしてきた友愛会でさえ、自覚した働者が知識階級による指導への不満や批判の態度を表面化させた。むろん諸情勢の好転という時代の流れもあって名称も「大日本労働総同盟友愛会」と変更し、本部の役員制度も大はばに改革された。大正八年九月のことである。知識人指導の運動はいよいよ限界となった。

その結果、改革初年度は、本部の中心機関・常任理事会は、理事七名のうち、働者出身はわずかに二名だったが、「翌年度には西尾末広・藤岡文六・木村錠吉らの登場により、働者優位の中央委員会となった」(前出「友愛会史論」)のである。

労資協調の友愛会ですら、知識階級排除の声が高まり、それが現実化していったのだから、もともと労資協調を認めないサンジカリズムやアナキズムを信奉する者達が、友愛会的指導者はもとより、働者の実態をよく知らず口先きだけの知識人労働運動家を激しく非難し、むしろ彼等の退陣を強く求めたのは当然だった。

その先頭に立ち、鋭い舌鋒でそれを煽っていたのが無政府主義の首領・大杉栄である。

大杉は堺利彦、山川均、荒畑寒村ら、明治社会主義者のメンバーの一人であったが、はやくから彼等と袂を分かち、現場働者のなかに飛び込み、「サンジカリズム研究会」を開いて若い働者と接触し、亀戸の働者街に往

いて起居をとにもするなど、その活動が異色を極めていたことはよく知られていよう。

この大杉は大正八年一〇月『労働運動』（第一次）を発行しアナーキズムの立場から労働運動界に一石を投じ、内外の労働運動やストライキの状況を詳しく報じた点が際立っている。

特に同紙三号（大9・1）では、巻頭に「知識階級に与ふ」を載せ、一六面で「賀川豊彦」を論断し、一七面の「労働運動と知識階級」では、大正八年一〇月前後に総合雑誌に発表された論文を中心に「謂はゆる知識階級の徒の余りにいゝ氣な愚劣に対する、記者の疝癩玉の破裂」を試みて、知識階級排斥論を展開し拍車をかけた。

しかし、彼もまたやはり東京外語学校出身の歴然とした知識階級に属する指導者であり、下層労働者が味わりごとを余儀なくされた屈辱とは無縁な人間だったところに最大の弱味があり、議論に迫力を欠いた。

どんなに彼が労働者街に住みついたところで、彼にとってそこはあくまで一時の住処でしかなかったが、亀戸の労働者は、そこが終の住処でありそこから抜け出せることはなかったのである。

たしかに彼は当時の社会主義者のなかでは最も過激な言辞を吐き、資本家階級のみならず、社会主義的同志に対しても激しく攻撃的であった。しかし無学な労働者が激越な言葉をわめきちらせば警察のやっかいになるのは必定だったのに、彼の場合は少しばかりカタカナまじりでそれを原稿にすれば、多額の原稿料となった。そして、この一点が大杉が愛したはずの労働者と彼を引きさいたのは至極あたりまえであろう。

大杉は大正九年一〇月、上海で開かれたコミンテルン主催の極東社会主義会議に出席した。そこで二千元（？）の資金を得て帰国し、大正一〇年一月、第三次『労働運動』を復刊した。それはボルシェヴィキ派との共同戦線を

意図したものであった。純粹アナキストから見ればこれは明かに裏切りである。

おそらく大杉のこの変貌が直接の契機となって、彼が君臨していたアナキズム陣営の内部から彼に造反する戦闘的活動分子が現われ、ついに彼等から逆には大杉が非難・攻撃される羽目になったのである。

吉田一、高尾平兵衛、和田軌一郎らは、大正一〇年四月一五日付で、文字どおり労働者自身の手になるタブロイド版八頁の新聞『労働者』を発行（終刊・一〇号・大11・5・20）して、大杉榮を含むすべての知識階級指導者を糾弾し始めた。

理屈や理論ではない、本当の労働運動は、労働者自身の手で為さなければならないのだ。何と言っても、ほんとの労働者の気持ちと、智識階級から出た労働運動者——指導者との間には何しても一つに成り切れない或るものがある。ほんとうに労働者の気持ちの分るものは、労働者自身を措いて他に無い。自分達は、はっきりと其事に気が附いたのだ。

（吉田一「労働運動の分派」・一号）

労働運動は、大杉自身の生命でもあり、又日本に於ける革命運動の中心と見てあるものも多い。同人として名前を運ねてるのは十人ばかりであるが、それに共鳴して働かうといふ者も随分沢山あるようだ。けれども、此処でも矢張り労働者は、今までの全ての場合と同じく、智識階級のダシに使はれてゐるに過ぎない結果に陥

ってゐる。

(同前)

従来も、やゝ自覚した労働者は、種々様々な運動をやって来たが、結局は何時も先輩者、学者などゝいふ連中のために利用され、彼等の道具に使はれてばかりゐた。けれども、いくらお人好しの労働者でも、さうく何時までも盲目ではゐない。彼等も段々にそれを自覚して来た。社会主義同盟の存在を疑はれて来たと共に、大杉の労働運動が又起った。

(同前)

ここで表明されているのが、知識人は打算的であるとか、当にならないとかいう観点からの批判や不満ではなく、彼等が知識階級に利用されるとかダシに使われているとかいった、いわば被害者意識からのそれであることは刮目すべきである。

「見え透いた智識階級のおだてに乗って彼等のお先捧に使は」(同前)れてきたという悔恨と反省がこれらの労働者に自覚されさし出したことは見落すべきではない。

そしてその点に無学な労働者が気がついてしまえば、彼等は無學歷なるがゆえに強いられたみじめな体験と生活をしてきただけに、彼等の知識階級への憎悪や反感は想像を絶するものがある。

『労働者』一〇号を通読すれば、そうした彼等の怨念にも似た感情がひしひしと感じられ、全紙面にその憤出を見ることが出来る。

以下、一部紹介しておこう。

労働者は少なからぬ金を、喰ふや喰はずの生活の中から絞られて、偉い人達に売名されて居るんだ。御前達労働者は黙って働いて居ろ、其うちに俺達が好い具合にしてやるとでも云ふのだらう。

(原沢武之助「指導者心理」・一号)

智識階級たる者、果して何する者であらうか。彼等は坐飲坐食を欲する横着物である。彼等あるが故に労働階級は益々苦境に陥るるのである。茲に於てか、我等は、資本階級を撲滅すると共に、智識階級をも倒潰しなければならぬのである。

(柿本兆南「智識階級を倒せ」・三号)

平 林 初 之 輔

平林初之輔が、大正一〇年一〇月に再刊された『種蒔く人』に翌年一月、同人として参加し、たちまちその理論的リーダーとなったことはよく知られた文学史的事項である。

そしてまた、彼のそうした地位を与えたのが、大正一一年六月の「文芸運動と労働運動」であることも知悉され

ていよう。彼は、ここで声高らかに次のように主張したのである。

最近に起らんとしてゐる階級芸術の運動は、少くもその本質に於ては階級の一現象、階級闘争の局部戦、階級戦線の一部面に於ける争闘でなければならぬ。従つてこれは単なる文学運動、紙上の運動としては解決の見込がない。階級戦の主力なるブルジョアとプロレタリアの決勝によりてのみ解決されるものである。(略)

プロレタリアの文芸運動は、文芸運動であるよりも先づプロレタリアの運動であることを念頭にをかねばならぬ。だからその綱領は文芸上の綱領ではなくて、プロレタリアそのものの綱領でなければならぬ。プロレタリアの解放——それがプロレタリア文芸運動の唯一の綱領である。

この論文は戦後はやく平野謙の『『第四階級の文学』の時代』(『文学』昭25・1)で高く評価され、小田切進が「『種蒔く人』の出発」(『昭和文学の成立』)で「平林のこの『文芸運動と労働運動』は、プロレタリア文学の意義と存在理由を明らかにし、解放運動全体の中での思想・文学運動の役割と位置をはじめて規定した歴史的な主張だった。」と位置づけた文学史上でも名高いものである。

現在こうした見解はほぼ定説化したといつてさしつかえなからう。

しかし、別な見地にたてば、これまで『種蒔く人』が持ち、かつ特徴としていたアナもボルも人道主義もといったゆるやかな共同戦線の色彩が薄れ、文芸運動のボル化統一への端緒となったということ、その当然の帰結とし

て、後年の文学運動の「政治の優位」性論のスタートがここに始まった点も見逃してはなるまい。

平野謙は前述の論考で『種蒔く人』の創刊（大10・10）が「語の真実な意味において、プロレタリア文学運動がここに始まる。」と力説し、大正一五年九月の青野季吉の「自然成長と目的意識」（『文芸戦線』）が「初期プロレタリア文学史に一応の終止符を打つと同時に、新しい『内部闘争』の道火線となった。……かくてプロレタリア文学はマルクス主義文学運動確立のため『戦線分裂時代』に突入することとなる。」との見解を発表した。

たしかに表面的には「種蒔く人」も、大正一三年六月創刊の『文芸戦線』も、「綱領」として「無産階級解放運動に於ける芸術上の共同戦線」と「個人の思想及行動は自由」とうたって出発しながら、青野の論文発表の直後にアナキストが排除され共同戦線は崩壊した。

秋山清の『アナキズム文学史』に収められた「アナ・ポルの文学論争一覽」を見ても、青野の論文直後のかまびすしさがうかがわれ、これが与えた影響の大きさと深刻さは想像に難くない。

だが、このときほどプロレタリア文壇のアナ・ポル対立が表面化せず、組織的分裂は派生しなかったとはいえ、平林の論文の真意は、『種蒔く人』本来の共同戦線を主張したのではなく、ましてアナ派の存在を容認したのではない。ポル派・マルクス主義の立場からの文芸運動を主張した点は特に留意すべきである。

平野のひそみにならえは、プロレタリア文学がマルクス主義文学運動確立の礎石を築いたのは、「自然成長と目的意識」よりも「文芸運動と労働運動」ではなかったか。それこそ、語の真実の意味において、「政治の優位」性論はここに始まり、蔵原惟人の「プロレタリア・リアリズムへの道」（『戦旗』創刊号、昭3・5）も、小林多喜二

の死もほんとはここに予定されていた、といっても言い過ぎではなからう。

平林が社会主義に共鳴し、社会主義の勉強に打込むようになるのは、年譜などで明かなごとく大正九年頃からである。やまと新聞時代はそうした傾向は顕著ではなかったといわれている。

大正六年早稲田大学英文科を卒業した平林は、市川正一（大正五年卒）と青野季吉（大正四年）というほぼ同輩の同窓生と知り合い、三人が国際通信社で机を並べて会社の翻訳業務のかたわら、社会主義の勉強を始めたのであった。平林は九年一月やまと新聞社を辞し、その後国際通信社に入った。

日比谷公園の盛り上った樹木を見下すその社の二階は、わたし達の職場であると同時に、むしろそれよりわたし達の勉強部屋であった。外国電報は、国際会議などがあって特に忙しい場合を除いては、日に教えるほどしかなく、ほとんど全部の時間をわたし達はめいめいの読書と、研究のノートをとることに費すことができた。ときにはまた文学論議にふけり、社がハネると付近のカフェでその続きをやるという風であった。平林やわたしのプロレタリア文学理論はそこで形成しはじめたのだといえる。（略）わたし達の勉強は、ほとんど社会主義に集中され、雑誌では河上肇の『社会問題研究』や山川均の『社会主義研究』の出るのを待ち遠しく思い、日本にない雑誌や本は金を出し合って外国へ注文した。

（青野季吉『文学五十年』）

やがてこの仲間に市川の同郷の佐野文夫と弟の義雄が加わって、「社会主義の研究だけでは満足しておれなくなり、その実践に結びつこうと身構え」（同前）『無産階級』を発行するに至った。

『無産階級』創刊号は、大正十一年四月一日付で発行され、発行人・編輯人・印刷人は市川正一、発行所は無産階級社（東京市外代々幡町幡谷四〇）となっている。

創刊号の「編集の後」には「月刊『無産階級』は学術研究を内容とする筈であったが、印刷にまわさうといふ間際になって、『さうはゆかぬ』と注意する者が出てきた。何故かは知らぬが『研究』の範囲がホンのチョンボリだそうでもとてもダメだといふのだ。それならといふわけで百方奔走して、やっと計画をたてなほしたのである。けれども何分『初心もの』揃ひのこととて、それでなくともいろいろと手違があつた処なので、今更全構造を土台から組みかへる余裕もなく、大体最初の計画のものとなつてしまつた。」とあるとおり、矢津九郎（市川正一）の「河上博士の二つの準備」の他は、エンゲルス・トロツキイ・ホルアナ・マルクスの翻訳で埋まり、彼等の勉強の成果を誇示した研究雑誌の色合いが濃いものである。ただし、翻訳者の署名がなく、同人の誰が誰を担当したかは明確ではない。

二号（五月一日発行）は、創刊号と趣を変え時評を入れた。「関西労働同盟大会」他四本時評があり、それぞれ執筆者の名前も載っている。平林はこの「関西労働同盟大会」を担当した。以下三号（六月一日）、四号（七月一日）五号（九月一日）、六号（一〇月一日）と続く。七号は、法政大学大原社会問題研究所刊行の『赤旗』『階級戦』復刻版の解題（犬丸義一）によると、号外として十一月に出たらしいが未見である。これを最後に、同誌は、

『社会主義研究』、『前衛』と合併して、大正一二年四月一日発行の『赤旗』となった。『赤旗』は七月一日から『階級戦』に改題し、八月号を出したとたんに震災にあい、そのまま休刊してしまった。

平林が署名入りで同誌に登場するのは、前述二号と四号の時評欄だけとはいえ、「断末魔の資本主義」といった調子でかなり激しいものである。彼は文学者であるよりもむしろ社会主義運動家だった。

大正一一年七月一五日に結成されたといわれる第一次日本共産党に平林がいつ頃入党したかは、党の結成期日や経緯・事情についてさえ異論や異説が続出しているような現状だから確定しがたいが、共産党の機関誌・『赤旗』をはじめ、傍系の諸雑誌のあれこれに顔を出し、非「文学」的な論陣もかなり張っているところを見ると、党内の地位はともあれ、共産党の重要な論客であったことはまちがいなさう。

ちなみに、彼が当時共産党系の諸誌に発表した非「文学」的論文・時評を次に列挙してみる。

「最後の幻覚——文化主義者に与ふ」

（『前衛』 大11・5）

「関西労働同盟大会へ時評」

（『無産階級』 大11・5）

「蟹気楼の『国民』へ時評」

（『無産階級』 大11・7）

「断末魔の資本主義へ時評」

(『無産階級』大11・7)

「無政府主義者の覬た労農露西亞へ翻訳」

(『前衛』大11・9)

「労農露西亞の利権政策」

(『社会主義研究』大11・10)

「頹味と痛快味へアンケート」

(『進め』大12・2)

「戦線をつくる必要」

(『赤旗』大12・5)

「新戦争の脅威」

(『階級戦』大12・8)

「青年運動の前衛の任務」

(『建設者』大12・8)

「宗教に走らんとする青年へ」

(『進め』大12・12)

尾崎士郎と平林初之輔

こうした概文や「労農露西亜」の紹介を誌面を通じて行なう一方、社会活動面でもいくつかの実践があった。年譜（『平林初之輔評論全集』文泉堂書店）その他の資料から拾い出してみよう。

一、「過激社会運動取締法案」について議会に対する抗議文執筆（大11・3 ※『種蒔く人』に発表予定だったが全面削除で不掲載）

一、メーデーで検束さる（大11・5）

一、自由青年連盟（長野県飯田市）発会式で講演（大11・9）

一、社会問題講習会（東大講堂）で講演（大12・4）

一、石神井での共産党代表者会議に出席（大12・4）前引・解題によると異説もある✓

一、参加禁止の思想団体は平林の発案で行商人連盟という組合を結成してメーデーに参加（大12・5）

一、早大の建設者同盟の講習会で講演（大12・8）

その他、組織的行動としては右にも書いた「過激社会運動取締法案」への反対運動、『前衛』の提唱した「露国飢饉救済金募集」に協力（大11・7）、「対露非干渉同志会」への応援（大11・7）などを同人とともに積極的に行なっていたようである。

ただ注目すべきは、前記復刻版解題とそこに一部引用の「市川正一予審訊問調書（第三回）」によれば、メーデーへの参加、労働組合の総連合運動、ロシア飢饉救済運動は「全テノ仕事ニ於テ私共ハ山川均及同人ノ下ニアツタ西、上田ノ諸君ノ指導ヲ最モ多ク受ケテ居タノデスガ……」という点である。

平林の「山川均氏夫妻の印象」（『婦人之友』大12・5）を読むと、「一二度お目にかゝただけ」と記されているが、『前衛』を核にして『無産階級』と『種蒔く人』は、相互に雑誌の内容紹介を掲載し、共同行動も多く、あたかも一心同体のごとくであったことを考慮すれば、平林が山川均から受けた影響は少くないはずである。

事実、彼は文壇の山川均と称されていた。大正十一年七月、すなわち平林の例の論文が発表された翌月の『新潮』の「文芸時評」で藤井真澄が「新進プロレタリア作家及評論家」という題で彼をこう評している。

平林初之輔。（前略）彼れの思想の根柢を為すものが、マルクスの哲学でありレーニン出現以後の主義である事は云ふまでもない事であるが、僕等はそれに就いて論ずるよりも、夫等の哲学主義を生まざるを得なかつた彼れ自身の個的生活——心理生活乃至生理生活を知りたいのである。（略）が、それにつけて、彼れに対する僕等の全的要求から推して、彼れの評論が新しきプロレタリアの勇敢にて賢明なる代弁であるだけ、それだけ個性による独創力に乏しいのが不満な点であると云ふ事だけは、茲に述べておきたいと思ふ。此一点が恐らく彼をして『山川均の弟』或は『文壇の山川均』と云はれる所以であらうと思ふ。それは屹度彼等兩人が同じマルクス学者でありボルシェビストであると共に、創作家でなくて評論家であるせいだからであらう。で、彼れ

平林の前途に就いては、益々其立場を拡大するであろうが、何時如何にして彼れ自身の獨創的表現力を色濃くするであらうか、……それが僕等の第一義的期待である。

結局平林は、文壇の山川均であり、共産党のイデオログとして振舞っていた間は、ついに藤井が期待した「獨創的表現」は実現しなかった。彼が「獨創的表現」を發揮したのは、それから七年後の「政治的価値と芸術的価値」(『新潮』昭4・3)である。もちろん、それが「文芸運動と労働運動」とは全く反対の見解を表明したものであったことは改めて論ずるまでもなからう。

大正九年、同じ会社で机を並べ、ともに社会主義を勉強し、マルクス主義を体得した平林、青野、市川の三人も、一番早く平林が脱落し、次いで青野が離れ、なまじ文学などに目もくれなかった市川だけが獄死という形でこれを全うした。市川が獄死したのは昭和二〇年三月、平林は昭和六年に世を去った。

いずれにしても堺利彦にわが国随一のマルクス学者と折り紙をつけられ(大正三年)、本邦最初の『資本論』翻訳者の業績を歴史に遺した高島素之が、同時にマルクス批判の先陣を切った人であったことと、平野謙のいう「唯物史観による最初の文学理論の建設者たる平林初之輔だったにもかかわらず、プロレタリア文学運動の功利主義的限界にもっとも早く気づいたのもわが平林初之輔ではなかったか」(「平林初之輔のこと」とは、政治と文学、とりわけマルキシズムとそれを考えるうえで大いに示唆に富もう。

「ごろつき」論争

「文芸運動と労働運動」が発表されたとき、中西伊之助がさっそく「ごろつき食倒し論——平林君に一言——」（『種蒔く人』大11・8）で抗議し、この応酬に、さらに尾崎士郎も一枚加わり、「平林初之輔氏に——『ごろつき論』に関して——」（『種蒔く人』大12・5）を寄せ、ここでも平林が尾崎に応えるという「ごろつき」論争が展開されたが、これは平林の本質が露呈している重要なものである。

中西が激怒したのは、「文芸運動と労働運動」の次のくだりである。

実際、社会主義運動の中に、働くことのきらいなごろつきや食ひたほしやがまじりこむと同じやうに、階級芸術運動の中にも、文芸のいろはもわきまへない連中が、糞真面目な月給取商売はいやだからといふので、あはよくば流行作家になりすさまさうといふどえらい野心を抱いて飛びこんだものゝあったことは事実である。

（傍点原文）

中西はこの点を摘記して「なんと云ふブルジョア的な口吻だらう！僕は決して平林君の小股をすくって快としてゐるのではない。プロレタリアは飽くまで共同戦線の上に立つべきものだ」と心得てゐる。」とまず一撃した。そして、——

事実、ブルジョアの眼光をもって今の社会運動を見れば、平林君の云はれる如き人達は、現在僕達の周囲によく／＼してゐる。——僕も恐らくその人であらう。さうした失業者は、悉く餓死か、破壊か、二中一を撰ばなければならぬ悲しい人である。(略)その人達は、過去数年間のあの階級戦の先頭に立って、みんな勇敢に働いた人々の零落の群であるのだ。平林君は、果してその人々を指して、ごろつきと云ひ食ひ倒しと云ふ理由を見出すことができるか。

と憤怒した。この平林と中西の応酬は、平林が「僕は実際直接労働に携はったこともなく、またその能力も覚束ないから、その点に関しては指導されんことを希望」していることと、中西が事実、市電のストライキを組織しているために、しばしば實際運動家側からの抗議といった形で論じられてきた。

しかし、そうした現象的かつ図式的な側面よりも、やはり、前項で詳しく紹介したあの下積みみの労働者達が、知識階級指導者に抱いたと同質の名状しがたい怨念のような感情から発したものであることは明白であろう。

たとい、それが彼等の怠惰からのものであったとしても、人生に零落した「人々と手を握って泣くことはできて、手を払って蔑しむことはできない。」という中西の一言に、人生のどん底を生きてきた者の万感がこめられているのではないか。平林が生涯知ることのできないであろう実感である。

私生児として育ち、さまざまな仕事にありつきながら苦学、学校も転々とし、キリスト教にも接し、社会主義にもふれて、大陸も放浪してきた中西の生きざまと生の軌跡は、大農家に生まれ、何不自由のない環境に育ち、早稲

田大学を出て、机の上で社会主義を学んで来た者には、とうてい感知できないものを体得させたはずである。

「宣言一つ」の実例をここにまざまざと見る思いがする。

平林はこうした中西のどろどろした感情を理解することなく、「ごろつき」と「失業労働者」の定義をくりかえし、自分は決してそれを混同していない、と訴え、彼のいう「ごろつき」の解釈と説明を次のようにした。

不幸にして社会主義者と名乗ってゐる不良青年組や、何ぞと言へば日本刀を振り廻すやうな連中のあることを吾々は耳にしてゐる。しかもその背後にかさま師がひそんでゐる場合のあることも聞いてゐる。それが為めに健全なる労働大衆に社会主義が如何に誤解され、従つて社会主義が障害されたかも知つてゐる。殊にこの社会主義運動に古い歴史を有す欧米諸国ではこの種のいかさま者が風向次第で社会主義者になつたり、反動派の手先になつたりした例がいくらかもある。

平林がこの後で、マルクスの用語を引用して自説の正当化を強弁している姿勢こそ、まさしく模範的なマルキストの典型的な答案であり、藤井真澄をして、「独創的表現力」を期待せしめた点である。

さて、この二人の「係争を僕は異常な重要さをもつて読んだ」という尾崎が、なぜか八カ月後、前述のような見出しで抗議というより平林に忠告したのである。

尾崎は、平林の指摘する不純分子や不良青年組が現に存在し、彼等の行動が健全な労働大衆に誤解を与え、労働

運動の妨害になつてゐる事実も認めたりえて、――

かくのごとき不良無頼の徒によつて健全なる労働大衆の禍されることを悲しむ吾々は、そんなことよりも、もっと根本的にそしてもっと本質的に社会主義運動の健全なる発達が阻害されてきた。そして現に阻害されつつある事実を認めなければならぬのだ。それは現在日本の社会主義運動の中堅であるところの運動家、学者、論客――すくなくとも低徊的な論理の概念的遊戯に没頭することに依つて運動を功利的に職業化しつつあるところの老朽社会運動者――それはある意味において現在階級運動の中心に立てる人々の大部分に適用される言葉であるが――を一掃し去ることである。彼等の無責任な行為がいかに日本の社会主義運動の中からいかさま不良少年の多くを輩出せしめるに役立ってきたか。そして彼等がいかに運動の純化を阻止したか。平林氏よ、これは概念ではなくて事実であるのだ。

これに対する平林の返答の要点は「若し社会運動者の一部にごろつきが混つて来たらそれは排すべきだといふのなら私の言葉とちつともかはりがないのだから文句はない筈だによつて、氏はどうして社会運動者が全部ごろつきだといふのであらう。」と、全く尾崎の発言の真意が理解できなかった。

つまり、彼は社会運動者のなかに一部「ごろつき」が混つてゐるからといって、社会運動者全部を「ごろつき」だときめつけてはいけない。ごろつきの社会運動者は排すべきだが、良い社会運動者は育てるべきだ、というので

ある。ここにも公式を振りまわす優等生の顔がのぞいてはいないか。

尾崎は平林に対して、なにも、社会運動者全部が「ごろつき」だとはいっていない。「低徊的……老朽社会運動者」が「ごろつき」に等しいといっているのである。そして、「其主義を禍する『ごろつき』たる」点は「寧ろ其卑劣さにおいては物の数にもならぬ文字通りの『ごろつき』の方がいかに生やさしいか。」と言ったのである。

ここに見られる平林と尾崎の落差は、中西との場合のように知識人とそうでない者から生まれているのではない。実際運動家と理論家のそれでもない。

すでに運動から「逃避行」した者と、現にその渦中にある者との差であり、社会主義者として自己省察、自己検証をした者と、まだ済んでいない者との違いである。

尾崎は早稲田大学では平林の六年後輩だったが、社会主義運動の実践に関しては先輩である。彼がそこから離脱し始めた頃、平林が入って来た。尾崎が師匠の堺利彦や山川均から離れたとき、平林は彼等に近づき、いま師事している。この径庭がついに平林をして尾崎の真意をこの時点では解させなかったのではないか。

この点について伴悦の「平林初之輔論」（稲垣達郎監修『プロレタリア文学の研究』）は興味ある仮説を呈示している。すくなくとも、この論争を軽視しなかったことは出色である。

伴は管見では最も長文の「平林初之輔論」を稿し、「ごろつき」論争を重視し、この事件を通して、平林の「転向」の芽を見い出そうとした。「プロレタリアートの解放一途にプロレタリア文芸理論家として、今日在る自己に対する懷疑、蔵原・中野はいうに及ばず青野にもあずかりしらぬ平林独自の内部的戦い」が始まったのではな

いかたのである。

しかし、もしこの時点でそれがあれば、平林の中西や尾崎への回答があればほど図式的公式的なものとはならなかったであろう。この論争で表出された彼の発言からは自己への〈懷疑〉は感じられない。

むしろ、「内部的戦い」を外部に表明された言動から判断するのは早計だといってしまうはそれまでである。

平林が有島武郎の「宣言一つ」を自覚し、尾崎士郎の「逃避行」を自らのものとするには、やはりもう少しの間と生々しい体験が必要であった。

もっとも、それは意外に早く来た。関東大震災後の社会主義運動内部の混乱、内外の非難、検挙、弾圧、共産党解党論議は、尾崎が平林に忠告した半年後にやって来た。おそらくこのとき、彼は尾崎の「真意」をはじめて理解したにちがいない。平林初之輔がまだマルクス主義文学論に心酔している頃、社会主義運動の最も困難な時代に最も苛烈に生きた尾崎士郎は、文壇にもようやくその潮流が反映されてきたにもかかわらず、「ひとり行く道」を一足先に歩み始めていた。ここでも尾崎の方が先輩だったことはいまさら贅言を要しまい。

あらゆる意味において、現在の私はたった一人である。私はいかなる集団にも属してゐないし、また将来属しようとも思つてゐない。さうして来年以後は、私にとって自らに期待することが、あまりに多すぎる。大正十一年は私の逃避行が突極した年であった。そして『低迷期の人々』の幻影は今の頭には全く残されてゐない。